

代申依るもの也と、巖谷寺十一代明誓の物語りなり。
（空曆十一年巳年六月十七日、七十八才城州代見空泉
寺にて遷化）

右の次第並河氏の家に林柯集と申候一冊の本あり。
其の中に當寺本尊様を譯其外養賢寺或は竟護寺觀音の
事共に相記しこれあり、一見の折から寫し候事如此。

又師道十六世真誓上人は、岸河内村の老人共申候ふ
る由聞かれ候延、右の河内村如來を塩月村より岸河内
の大願寺と申寺の本尊が安置奉り御供養し奉る所が、
薩摩勢乱入る折から放火し、彼寺惣方一座の烟と上
る。彼本尊を川中へなげ込し由、不思議なるが有被水

導、いづれまはかば山根なる大なる石の流れにのぞ
みし、其の上平にして老丈四方持もあるべし、其の上
に如來在せしよし。其れと又高畑の方へ迎へ奉りしよ
し。夫より當時に移り玉ひし由、尤高畑に昔此寺あり

し由、今現に寺の後に地蔵尊を安置す。彼岸河内村
には大願寺ありし跡とて、今現に大なる竹籬となり、
老幼皆依へて寺屋敷といふ。

南相転々として長く當寺に留り終ふも、定めて故ある
べし、凡慮知る事を得ず、嗚呼佛神の所依強し。其の
るべきものある也。己に神代には交斂自ら出現すと、
憑かざるものは皆是とうたがふ。おべ変わるがやその心

か及ばざるが致す所也。
皆にて今にて縁にふれずは神仏の靈妙不思議を
顯す事一出。古伝如來の彼森の中へ在しませしその下

に空斂一振自ら出現し在し有様言語同断、心行所感と
唯疑いと去り深く信すべし。夫徳を得あり、疑は損あり、
檀蓋誰か求めん。其の心あらんそのは時々歩を違

ひ、現當共に祈り奉るは方とが御誓の空しからん。
我等も現に此本尊に奉事す。當來は必定道を成ん

と

歡喜展べか左し、從來時の住職十夜の砌り、時を
日からの此事を中へべ、衆生の徳を増ししめ及、
本尊の本意も顯れはべし。又冥に神祇も悦び給は
ん事うたがふべからず。

于寺享和三癸亥の年九月二十四日
觀月窓下介及て書記し畢

巖雲山安養院潮谷寺十七世法誓

（注）① 弘らゆらん 上列の如くふくき、ふらしきつ寝て衣類等と
包むに用ゆる。

② 蛇濟 佐伯市蛇濟

③ 塩月村 蛇濟より三軒程上流、佐伯市塩月五

④ 七生から大権現 塩月鎮座長長神社

⑤ 百姓の家 塩月の心折長藏氏宅、善右衛門氏の先祖
刀は珍寶して伝へず

⑥ 大願寺 佐伯市岸河内正地徳庵の前身、昔は土台地
あり、今に寺屋敷と伝へられてゐる。

研究

佐伯の港はどんな衝きをしてゐるか

——主として木枝の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校教諭
同 校附誌誌クラフ顧問

木会会員 市野 順

仁

第二章 佐 伯 港

四 佐伯港における臨海工業の動向（つづき）

(二) 主要工業の内容と問題点

臨海工業は市街のほぼ北にあることとし、市民に直接影響のある人々は限られているので、地域社会と疎遠になりがちである。必ようなものでないが、たゞに往んでいゝやなことが起ると全面的に敵視したリ、対立的な感情がおきてくるのも人情と云うものであろうか。

大伴、佐伯周辺から出勤している工場労働者は、その数三千人に及ぶてあろう。例を挙げる。

- 興 人 六四〇人 三平合板 一、七六八
- 佐伯造船 五四七人 日本セメント 二九八八

(労働基準局調、本エム) 此は日本造船、鉄工所を念お。佐伯造船に於ける下請はこの数字以上

この外工場があるため出来た関連産業や、各種商業の経済的剌激を直接に或は間接に育っていることは事実である。市民は単に企業の固定資産税額だけで、工場が地域社会に対する経済的利益を測つてはならぬし、それだけの企業の評価或は段階づけをすることは科学的ではないと思ふ。参考までに昭和四十四年度の法人の固定資産税と列挙すると、次のような順序となる。

- 興 人 一、四七三、一九〇
- 日本セメント 六、九四六、六五〇
- 三平合板 二、八四七、九〇〇
- 興國運送 一、六五八、一三〇
- 佐伯造船 一、一五三、〇三〇
- 仲夫紡績 七三〇、七〇〇

(南海新報による)

一方工場は巨額な資本で広大な土地や公海を占有

し、利潤をあげ排他物を空に海にも放出し、恐怖と不安と嫌悪感をもちたうせている事も事実である。それでいて工場も頭脳は地域社会のことより、本社も銀行もを気にしているのではないかとかんがひたう場合もある。人間関係と同じく法人に対しても相手と理解し合ふことはむづかしいものだとつくづく思う。工場と地域社会の関係は、利益もあり不利益もある事実と客観的に、この目でつかふ理解することから始めなければならぬと思ふ。

このような意味から、この度は主要工場の案内書の一部を紹介し、工場の責任者にお話を伺いながら意見を述べてみようと思ふ

1. 主要工場の内容

○ 日本セメント

日本セメント 佐伯工場 案内

工場概要

- (沿革) 大正十四年 工場建設(旧日本セメント社)
- 十五年 操業開始(回転窯二基)
- 昭和十年 回転窯一基
- 十四年 浅野セメント樹に合併
- 十五年 回転窯二基を朝鮮に移設
- 二十二年 日本セメント樹に改名
- 二十七年 回転窯一基(現二号)増設
- 二十八年 八〇M出荷岸壁を完成(水深八、五M)
- 三十三年 出荷岸壁を一一〇Mに延長
- 三十四年 回転窯一基(現三号)増設
- 四十年 回転窯一基(現四号)増設
- 四十四年 回転窯一基(現五号)増設

(現況) 1. 製造品目 普通ポルトランドセメント

- 2. 生産能力 一九〇、〇〇〇 吨
- 3. 従業員数 三三四八
- 4. 敷地面積 一三二、一三一 坪
- 5. 原燃料 重油

(原料)

- 石灰石 津久見市下青上
- 粘土 南海郡那水津井宮野田
- 分イ石 津久見市四浦(東裕工業)
- カラミ 佐原町所(日鉄製業) 茨城県四原町(住友金属)
- セッコウ 香川県、山口県、宮崎県

(工場)

- 上磯工場(北海道)
- 埼玉工場(埼玉県)
- 西多摩工場(東京都)
- 大阪工場(大阪府)
- 土佐工場(高知県)
- 門司工場(北九州府)
- 香春工場(福岡県)
- 八代工場(熊本県)
- 佐伯工場(佐賀県)
- 糸崎工場(広島県糸崎市)

山田英彦工場長は、電話で「どうぞ、お待ちしています。親切な言葉で面会を許して下さい。工場長室のテーブルの上には、新しい会社社要覽の一部が置かれています。」

セメント工業はすでに成熟産業で、成長率七%、八%、九%と減少傾向となつてきた。それでは韓国、フィリピン、台湾の民族資本が伸び、業界に強く影響しはじめた。

ン、台湾の民族資本が伸び、業界に強く影響しはじめたのも一つの理由である。そして原料も製品も重量の大きいものであつて、多量に販売してこそ採算が合う業種である。臨海地の工場でなければ、今後の発展性は望めない。上記の案内書にもあるように日本セメント十工場の中、九州に四工場あつて、臨海に位置し原料地は近く有望な一つは海濱工場がある。大分臨海工業地帯の発展にもあつてセメント需要も予想され、今後回転窯一基増設することも考へられていた。セメントはセメントタンカーと云われる五百吨乃至六千吨級の大型船で、北十%は海上運送となつてゐる。また需要の量を全国的に見ると四十五%は生コンでその量は、五〇〇万トンに達する。バラ積みで効率を考へ、袋積みは六、〇〇〇トン乃至一〇、〇〇〇トンに達する。

セメント生産における日本の位置と見るに、日本は一七〇万トン、ソ連一七、五〇〇万トン、米國一、七〇〇万トンとなつて、国土と人口との面から見ると世界第一位である。

装置工業の中でも、セメント工業は鉄工業の1/10の資本です。労働力も少く、機械化がすすんだ静かな工業である。海濱工場に於いても労務者の移動が少く堅実で安定しており組合もおとなしい。すでに二代目の勤務者もいるという話である。

それでも問題点といえぬ工業用水がその一つである。ここでは用水を多量にとる工場ではない。しかし、海濱地帯で利用してゐる佐伯上水道の半額(二千位)は工場が支払つてゐる現状である。残り八五〇%は工場外の四か所に水源地(井戸)を掘つていて、なお田植時に不足する。工場内にも井戸を掘つて使用している。公害については地域の人々から批難も長く聞かれるが

「たしが、昭和四十三年は機械の故障で、迷惑をかけたので早速改善したが、まだすべて解決していない。外部に対して懸念も少く内部も静かな中に、工場長の眞摯な語で、時間が経つのも忘れてしまった。時計をなても急に打切らず、話し地域産業に対する企業責任者のモラルの問題から、教育問題、時代主義的な日本人の考え方を発展していった。会談は余談からその素顔が出て、コミュニケーションができる。それに、時間と心の余裕が必要のようである。

○ 二平合板

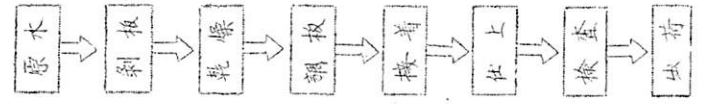
1. 会社の概要

社名 二平合板株式会社
 所在地 大分県佐伯市港五三三三三
 設立日 昭和二十一年十二月十二日
 資本金 一〇,〇〇〇万円
 役員 取締役会長 村上夕ヶノ
 取締役社長 村上 啓之
 専務取締役 村上 正三
 常務取締役 田中 栄
 常務取締役 河村 勝之
 取締役 朝来 尋基平
 取締役 多田 重美
 取締役 花崎 敏明
 監査役 室永 菊次
 監査役 上田 保

従業員数 一〇〇名
 事業種目 輸出、国内向け各種合板、新建機各種
 ラワン製材、フローリング、パーティクルボード、雑木フロア、木炭、手

事業部門	土地	建物	生産能力(月間)
本社及本社工場	一六,〇〇〇㎡	一四,〇〇〇㎡	一七,〇〇〇枚
海河工場	二,五〇〇	七,三〇〇	七,三〇〇枚
鶴谷製材	三,〇〇〇	三,〇〇〇	一六,七〇〇枚
		一,五〇〇	三,五〇〇枚
工場	二六,五〇〇	二,〇〇〇	三〇,〇〇〇枚
		七〇〇	一五〇,〇〇〇枚
川河工場	上,〇〇〇	三,〇〇〇	二〇〇,〇〇〇枚
出張所	東京、大阪、福岡、大分、鹿児島		

2. 合板の製造工程



社長村上啓之氏は地域開発委員会の港湾委員長として、社会の諸問題に関心をもたれた方なので、仕事上のことはかりでなく、中広いお話を伺えるものと期待し、再三手と打って見友が未だにお会いすることができない。

この業種は原材料を海外に仰ぎ、製品の販売も外向けがあるため、社長自らも外国に足を伸ばさねばならない場合も出て、席暇まる暇もない。田中常務のお話によると、原木地の移動が一つの課題で、十五年前はフィリピンのミンダオオ島から三〇%、十年前からマレーシアの北ボルネオから四〇%、インドネシア三〇%と、さ

らに最近ではニューギニアへと移って来た。一本の木が大
 体百五十年位経って来て、伐り出し、積み込みのよい場
 所を求めて開拓して行くので広範囲にわたるらしい。こ
 うして東南アジア、南洋方面の現地から積み込み、運送
 し、荷揚まで一か月を要する。それに競争もはげしく、
 船水はますます高騰を呼ぶわけである。

単板とか合板にするには、必ずしもラワン材等のよう
 に南洋材ばかりでなく、北海道ではブナを材料とする合
 板会社も十社ほどある。外国にしても米、ソ、ヨーロッパ
 パ（アフリカ材）と、それぞれ熱帯林、寒帯林から伐
 り出している。

製品の販売先も米國に七〇%、それに英、カナダ、オ
 ストラリア、沖繩へ。十年前は七〇%を海外へ出して
 いたが、今は二〇%となつた。生産量はかつても海外輸
 出のパーセンテージは下つた。日本の購買力の層の厚さ
 がわかる。

合板会社も海、船、港なくしては成立しない工業であ
 る。とくにこの種の企業は多数の労働力を必要として、
 近代化しにくい手工業的中小企業の性格をもっている。

今九州でも十二社あり、昨年合板業界の構造改善事業
 五ヶ年計画ができて以来、業界の自主的提携、企業合
 同、合併がすすめられていく現状である。やがて完成す
 る海浜地区の佐伯合板は型ワケ専門工場で、建築、土木
 業界の需要に応えるための、改善事業にそつた近代的な
 ものである。またニ平合板と三池合板の提携は大分県下
 の販売ルート確立を目ざし、中小企業促進法に基づいた
 ものであることが競売新聞にも報道されている。

ニ平合板は佐伯市で生まれ、育ち、成長した。本社工
 場を始め、海浜工場、鶴谷工場、川向工場、更に佐伯合
 板と、戦後からの足跡がはっきり物語っている。大きく

なるにはそれだけの努力があり、地の利を得た結果でも
 ある。

夏休みに入つて四日間、私は朝の七時から八時過ぎの
 一時間、女島港、鶴谷港、葛港の防波堤に立つて、工場
 の最端の緑を見ることができた。

徹夜していつ起きたと自分も分らず白い煙を短くくわらし
 ているのは興人さん。うす灰色の煙を高く高く、お上品
 にけむつていくのが日本セメントさん。お隣のように入
 かりきらわれる煙には縁がありませんよと、クレインが
 首を長くして主人の来るのを待っているのが造船さん。
 真夏の空をむくむくと吹き上げ、残月をけふらして知ら
 ず寝かしているのがニ平さん。

先日日本セメントの庶務課に、電話で煙の成分を聞いて
 見たら、硫化カルシウム、珪酸等ということがかつ
 た。さて時折黒煙が吹き散らすニ平さんの煙はいかが
 なものであろうか。すでに除塵装置はしているそうだが
 朝の空気を一杯すって深呼吸する気にはなれないことば
 地区の人々にとつて残念なことであると思つた。朝は陸
 風が吹いて港の上をおむい、大入島の方に流れていくけ
 れども、日中は海風が吹いて附近の洗濯物を汚し、民家
 の食卓まで侵入することはありうることである。海で及
 ラワン材の陸内運搬により旅客船に支障はないものか。
 大暴風雨時は市民の不安がいつてもよみみかえつて、長年
 潜在意識にたまつていく感情だ。

朝霧をついて鶴谷港を斜に横切つて葛港を往來してい
 る。

○ 佐伯造船所

▽白栴鐵工佐伯造船所の沿革（概要）

大正八年十二月 資本金五百万円を以て株式会社白栴鐵工所設立（焼玉機、肉の専門工場）

昭和三年七月 佐伯造船所を設置する。

三二年一月 資本金一億円を増資す。

九月 佐伯造船工場を設置する。

三六年四月 佐伯造船所に陸機部を新設す。

三九年一月 田中豊吉社長辞任相談役となり、

田中徹男社長に就任。

四〇年四月 資本金と一億五千万円を増資す。

四一年七月 石川島播磨重工業（株）と業務提携。

四四年四月 田中産業株式会社と改称、造船造船部門は株式会社白栴鐵工所として新設

す。

▽従業員数（昭和四十三年一月現在）

区分	社員	工員	社外工	計
本社関係	七〇	二	〇	七二
白栴工場（造船部）	六六	三一三	三二	四一一
（造船部）	三〇	一〇六	三五五	四九一
佐伯造船所	一二六	四六五	六六一	二二五三
福岡工場	八	四四	〇	五二
計	三〇〇	九三〇	一、〇四八	二、二八五

▽営業品目

- 大型船 貨物船、油槽船、貨客船、客船、冷凍船
- 造船、特殊船
- 小型船 漁船、船、曳船、巡視船

造船設備の概要

船台

長さ一六五米 総トン数二、〇〇〇トン用 一基
長さ一二七米 〇 五三〇トン用 一基

佐伯造船所は、発展途上にある工場にふさわしく、大規模工場長に若々しい、新任早く将米ハビジョンを描く方針の模索を以てしているようでもあつた。

日本の造船界が世界に群と抜いてゐることはあまりにも有名である。昭和四十四年度の世界の建造量一八〇〇万トンの四十一％は日本の実績であり、現保有量も米、英、ソルウエーを以て、リベリアに次ぐ第二位である。それにもかかからず物資輸送に自国の船舶は半分に落ちたとい現状である。従つて今後の造船界が、経済大国を維持して競争に打ち勝つためには、各種の工夫改善が必要となつてくる。例之以五〇万トンの津、有明海、坂出、

一〇〇万トンの長崎に建設予定の如く、その第一が船舶の大型化であり、専用化、スピード化、省カ化等である。佐伯造船所も大手大企業石川島播磨重工業と提携し、その体制におくれじとしてゐることは前記した通りである。現在佐伯造船所で九、〇〇〇トンの一六、〇〇〇トンの船台を建設すれば一ニ〇億の売上上げがでやう。造船所は一日も早く廣い敷地が欲しい。それには海を埋立する方法もあろう。濃霞山を埋ることも考へられる。他から売却してやらうこともあろう、或は政府の土地を借りる手もあるかも知れない。これには莫大な資本も必要であるし、強い抵抗と複雑な問題が予想される。

二十五年の歳月を要した。今日ではそんな悠長なことは許せないであろう。しかし大々為すには時間が大切である。先ずは内部の健全な工場経営により、一步一步目前の障碍を取り除き、次の飛躍に立向う姿勢が一番市民や市当局と納得させてくれる近道であろう。造船所は、汚水、大気汚染、騒音、悪臭等、公害が比較的少い業種で、地域社会に歓迎されるはずである。それに工業用水を多く必要としないこと、労働力を多く必要とすること、各種の関連工業を育成すること、陸上交通機関をひどく使用しないこと等の工業は、地域社会に対し経済的貢献度が大きい。左しかに佐伯の地区造船に適している。今後展途上にあるこの業界から、市当局に要望することが今後多くあるかもしれれない。その際は総合的な立場から、佐伯の個性は何かを発見し伸ばしていくことが大切である。

佐伯地区は何と言っても地方である。瀬戸内海沿岸の工業ベルト地帯や、中央の都市の造船界の労働者の移動は大変ばかーいという。その点、定着性があり安定性があることは、工場にとつて非常にありがたいことらしい。また反面、労働者が通勤でき、家で何か副業をして収入が多く欠勤があつたり、ノンビリムードで積極性に乏しく、研究心なく、井戸の中へ蛙であることが欠点としてあげられている。

大坪工場長は労働力の価値と、労働者の質的向上に強く関心を持たれているようであつた。

○ 興人 佐伯支社

▽ 沿革 昭和二十六年七月 佐伯工場竣工
二十八年四月 佐伯工場操業開始

▽ 規模

昭和二十六年六月 イースト核酸製造所起工
二十七年七月 イースト核酸製造所操業開始
二月 佐伯支社として発足
四十年一月 興人佐伯支社と改称
敷地 一、三九五〇〇㎡ 建物 四三、〇〇〇㎡
従業員数 七〇〇名

▽ 製造と販売

○ 溶解用。バルブ
○ 特殊用。バルブ
○ 核酸関連物質（医薬品、試薬）
リボ核酸、ヌクレオチド、ヌクレオサイド、デオキシヌクレオサイド、プリン、ピリミジン、ペントーズ

○ イースト関連物質（医薬品、試薬、飼料、肥料）
トルラ酵母、KR酵母、グリーン酵母
補酵素 COA NAD GSH 等

○ イーストエキス

▽ 厚生施設
社宅 八二棟（一七戸） 独身寮 二棟（収容人員 四〇名）
クラブとホール（健康会館、収容人員 八〇名）
共同浴場 理髪所 売店 診療所 野球場
バレーボールコート テニスコート

興人と云えば公害の主人公で、仕事の内容や会社のビジョン等を立入って知ろうとする人も少ないのではないかと思ふ。

工場長にも会えず、矢野総務課長に会談したものの、家に帰つてノートと整理してみると、私の知り左かつた

る空気があつたかではなかつたかと思つたりした。それは冗談として、前日工業は魔術師のようなものであると私は書いた。しかし日本セメントにしても、ニ平合板にしても、造船所にしても、あまり的確な言葉ではない。それは名の如く化学工業ではないからだ。その点興人をけは、その名にふさわしく、複雑な化学的変化の行程を経て、魔術師のようには製品を生み出す工場である。

実は今日(七月二十九日)矢野総課長の命で、「コージンニエース」社報の五六七号と、わざわざ自宅まで社員が持つてきて下さつた。

それによると興人のモットーは「変化に挑戦し、一板に成長を勝ちとる」と書いてある。興人では四十五年五月一日、資本金を四十八億に増資している。その説明会の席上西山社長は次りように話している。その説明会

「興人の経営の方向はバルブとレーヨンからの脱却を目指したいということです。……そして多角経営をすすめてきたわけですが、その手始めとして昭和三十

五年に化学紙事業、つぎにセロファンおよび機械事業に進出したしました。三十八年に建設事業、三十九年にはハブス事業、それからプラスチックフィルム事業

を起しました。さらに四十二年にPVC、PVAを原料としたコーデランと称する新しい合成繊維の事業をはじめました。

之等多様な新規事業部門の一環として、佐伯工場に於ける「醗酵化成品製造のCOPコリン(註)製造工場が完成し、医薬品合成への第一歩を刻ましました」と。六月月号に大きく記載されていた。

(註) COPコリンは 脂質代謝の補酵素で、交通事故等による頸部

脊髄の損傷や、脳脊髄液の後遺症とての意識障害の治療に用いられる。この薬剤は、武田薬品によつて開発され販売されている。

また待筆すべき記事として、「興人が第一着手として建設したサラワラのチツプ工場が成功したということ、バルブ業界では、興人のマンブローチツプとせよおけてもらいたいという元運が非常に高まってきた。山陽バルブ、神崎製紙、十茶製紙、それに日本バルブの各社から具体的に要請がでてまいつたわけです。……チツプがラワン材採りに東南アジア各地を開拓するように、興人は於いても外注の開拓がどしどし進められている。また四月十一日付をもつて佐伯支社における新田支社長のあいさつがあつた。去る者の言や尊して、横山為祐氏の言葉を拜見すると、佐伯工場の問題点がうかがえる。

「わずか一年半の短い期間ではございませうが、工場排水に關する渉外關係とその処理対策設備の問題。将来導水を予測される、新しい事業の立地基盤整備の諸問題(港湾、用水道路、構内用地の整備など)と二つの大きな課題に、支社の皆さんの熱心な、また気持ちのよいご協力を願ひたい、非常下感銘深く仕事をさせてもらいました」と。

佐伯の興人をしりて愛される工場、期待される工場にする為には第一に排水汚濁の解決である。しかしこれは佐伯湾全域に長年に亘つて拡がった茶褐色を、以前の青い海水にするとは殆んど不可能に近い。だから海岸部すべでの人々の悪評を拂い去ることはむづかしいと思ふ。しかし要は実質だから徐に辛味強く、自然の海に帰す努力を地域住民として期待してやまない。この問題に挑戦し、成功を勝ちとつたならば、興人の名は一躍天下に知られるであらう。

私権喪失に對して、強い期待と希望を持つ根柢の幾つかがある。

第一に、業種からして内外の変化に對応する姿勢を持つてゐること。

第二に、広大な土地と公権は、社々権威と責任にかか

第三に、外貨の輸入、其他貿易移出入基地として、佐伯港行政に、諸企業側としてカリーダッシュアップをとり、市政とダイヤップでできる素地があること。

第四に、興人の変化は、佐伯臨海工業を以てなく、地域産業の開發を大きく変える力があること。

私達は外から志接したい。そして長い目で見たい。きつと外觀からも、内容面からも、市民に愛され、期待にそつ大工場となることを信じてゐる。(この項終)

研究

村里にそむくもの

赤木村大庄屋文書の周辺(その七)

会員 羽 柴 弘

焼けつくような炎天下、全身汗でビツシヨリの田や畑の仕事、傷けが傷けどその労苦の徒晶は殆んどをお上(藩庁)に吸い上げられていた江戸時代の農民たち、その報われない姿は赤木村に於ても同じであつた。然し中にはその憤懣を次の様な形であらわし、抵抗をこゝろ及て

(資料 三十一)

覚

津井浦

静 吉

右之者去安政五年三月、予細御座候ニ付当村へ所替被 仰付届申候迄、平日親身成着ニ御座候。然迄当止月中旬頃、公不狀御座候。近來ニ相成運々、我急差重リ、最早生死之程も難計御座候。依此段御断申上候。以上

西七月廿四日

後 人印

津井浦で静吉がどのような曲事としてのお咎めで身つたかそれはわからないが、所替(村からの追放)で赤木村に預けられた。恐らく冷たい眼で見られる生活であつた(うが)寂気が進んでも早や生死の程も預束ないといふの唐書である。

又こんなものもある

(資料 三十一)

覚

赤木村百姓 □ 右衛門 弟

用 吉

酒 四十七歳

友江 家内 娘

志 丈

酒 十五歳

右之者共吉月七日夜、家内之首江何様之儀も不申聞。村方立出申候。

徳兵衛 家内 弟